

うずみ火講座 2018

「3・11」東京電力福島第一原発事故から7年。新聞うずみ火・自由なラジオ共催の標題の講座に参加した。

うずみ火は、ジャーナリストの故・黒田清さんが訴えた「戦争反対」「人権社会の実現」の思いを受け継ぐべく、生前、教えを受けた記者仲間と2005年9月結成。毎月1回、月間のミニコミ紙「新聞うずみ火」を発行している。B5版32ページの小さな「新聞」だが、一人ひとりの生活の大切さ、生活の中の喜怒哀楽を紙面に盛り込んでいきたい。「うずみ火」とは、炉や火鉢などの灰の中に埋めた炭火のこと。決して消えることのない残り火に、不屈・抵抗の意思をこめた。(うずみ火ネットより)

今回は京都大原子炉実験所・研究員の今中哲二さんの「福島原発事故から7年メルトダウンの後始末はどうなるのか」と題した講演。

今中さんは原子力の安全性を問い続けた「熊取6人組」の一人で、福島県飯館村などでの調査研究がテレビでも広く紹介されている。うずみ火講座では何回も話されてきたようで、今日の内容は次の2点であった。7年前に福島第1原発(イチエフ)で起きたこと、いまのイチエフの3つの大きな問題(原子炉建屋プールの中の使用済み燃料の取り出し、増え続ける汚染水の後始末、核燃料デブリの後始末)について。

話は2011年3月11日14時46分から始まる。きっかけは地震・津波だったが、福島原発事故は人災だと。昨年6月30日の東電刑事裁判で明らかになった2008年の防潮堤計画では、「2008年に、東電内部チームから、福島原発で10mを超える津波の可能性の報告があった」。だが対策はとられず、津波により全電源が喪失し、水素爆発などへと続く。BWR型原子炉の構造を分かりやすく説明し、3つの原子炉でのメルトダウンについて、廃炉の展望を含めて語る。

まとめとして4点あげる。

- ・そもそも、何をもって廃炉とするか明らかでないが、イチエフの後始末が終わって、イチエフが更地になることはありえない。
- ・燃料デブリの現場検証がはじまったばかりで、「廃炉にむけてのロードマップ」は、“絵に描いた希望”に過ぎない。
- ・イチエフの最大の問題は、燃料デブリと地下水が接触して汚染水が増え、さらに太平洋に出て行く恐れにある。
- ・汚染水が増えず、汚染水が海に流れないようにできれば、デブリの取り出しをあわせることもないだろう。



(2018年3月20日)